

復本先生への感謝

小 澤 幸 夫

復本先生は誰もが知る俳句・俳論の権威である。御著者は優に三十冊を超え、いずれも高い評価を受けている。論文は数限りなくあり、先生が創刊されたこの『麒麟』でも、御高論が載らない号はないほどである。以前在職されていた坂本先生が「季刊復本」というようなことを言われていたがまさにそのとおりで、お忙しい中いつたに何時研究されているのだろうと思ったことがよくある。先生の御著書には純粹に研究者向けのものと一般向けのものがあるが、その根底にあるのは書誌学に基づいた学問的な厳密さだけでなく、実作者としての感性和、ひとりひとりの読者に語りかけるような人間的な温もりだと思う。文学研究は高度な意味での評論とならざるを得ないところがあると思うのだが、その意味で先生の御研究はまさに学者であり詩人である先生にしかできないものなのではないのだろうか。

入試の監督と一緒にさせていただいた時、窓の外を眺めながら手帳を取り出し何か書き付けていたお姿を拝見した。おそらく俳句を作っておられたのだろう。他の者が入り込むことができないような空気がそこにはあった。

その日の休み時間、誘われて横浜キャンパスの周りを散歩した際、以前から疑問に思っていたことを訊ねてみた。なぜ静岡大学人文学部の教授を辞め、神奈川大学経営学部に移られたかということである。お父様が神奈川大学の事務局長をされていたこと、そしてまだ働き盛りでなくなられたことをお聞きした。先生の神奈川大学にかける情熱をあらためて感じるとともに、申し訳ないことを伺ってしまったと思った。

入試に関連して、今はもう時効だと思うので書かせてもらうが、作問を御一緒にさせていただいたことがある。まだ記述式の問題があった時代で、採点に大きなブレが生じた。予備校の模範解答は出題者であった僕の意図に沿ったものだったが、一緒に採点してくだつた某先生はまったく別の意見で、結局責任者を務めていた復本先生が代わりに採点してくださることになった。先生はけつして僕を責めることをせず、むしろねぎらつて、その後一緒に飲みに来て行ってくださつた。

飲むといえば、復本先生からいただくお手紙にはよく「置酒歓談」という言葉が書いてあった。脾臓が悪いと

伺っていたので、そんなに飲んで大丈夫かと思うのだが、けつして乱れることはなかった。陰で人の悪口を言うこともなく、いつも他の先生方のことを心配されていた。だから先生との酒の席はいつも楽しいものだった。先生は教授会でも「人の和」を説かれていたが、周りは常に暖かい空気に包まれていた。横浜文学賞を受賞されたお祝いだっただか、還暦のお祝いだっただか、出版記念だっただか、あるいはそれらのすべてをかねてだっただかは忘れてしまったが、ある時お祝いのパーティーがあり、学部の垣根を越えて多数の方が出席され、女性の先生方が文字通りボランテアで受付をしておられた。これも先生のお人柄であろう。

先生が事あるごとにおっしゃっていたことの一つは「大学とは学問を愛する人たちの集うところである」ということである。「教える教えるといつても何を教えるのか」ということも常々口にされていた。これは古今東西の真理だと思うのだが、長いこと大学に勤めていると日常の雑事に追われ、ついつい忘れてしまうことである。「研究をする」、これは僕のような怠け者には自分を叱咤激励しなくてはできないことであるが、先生御自身は自然にそれを実践されていた。研究大学と教育大学を分けようという風潮のある昨今、先生のお言葉は肝に銘じておかなければと思う。

先生とのことで忘れられないのは湯河原での集いである。今はもう退任された先生方が集まり現役の先生方と一緒に文字通り「置酒歓談」、梅の一夜を清談で過ごす。こんな時は先生もいつも以上に喜色満面、何時果てるともない宴に仙人のごとく時を忘れるのだ。連句を楽しむこともあった。そんな時は皆真剣な顔つきになり句をひねり出す。もちろん捌き手は先生である。その場で行う短評がまた適切で、和氣藹藹とした中に、「座の文学」の楽しみを発見する。「樂興の時」ならぬ「風雅の時」、このような時間が持てる場所は、日本に大学多しといえどもなかなか見つからないであろう。

思いつくままこのように書いてみると、ますます復本先生がかけがえのない存在であるのが思い知らされ、是非ともこれからも学生と我々のために神大に残って指導していただきたいと願うのだが、残された人生を研究に打ち込みたいという御意志は固いようである。聞けば正岡子規の上下二巻にわたる研究書を数年後岩波書店から出される予定であるとのこと。先生のますますの御健勝と御発展を祈念して感謝の言葉に代えさせていたたく。

初花の見え隠れする幼稚園
北窓開くコーヒーの朝